

# 序章 柔術から柔道へ

# 講道館創設

## 組討ちから柔術へ

嘉納治五郎が講道館柔道を起こしたのは明治時代。しかし、そのはるか以前に柔道の起源はある。相撲など基になっていた戦場での組討ちである。古い時代の日本の戦は、まず両軍が離れあつた位置から弓のかけ合い、その後に刀、槍などによる兵士同士のぶつかり合いが行われるのが常だつた。その際に刀などが折れたり、小刀などしかなくなつた場合に、素手で相手と組み合つ技術が工夫され始めた。

室町時代に入ると、相手に堂々と一騎打ちを挑む気風が重要視されたことなどから、組討ちの価値観はさらに高まつたようだ。この頃に投げ技や抑え込み、当て身技、絞め技、関節技などが生み出され、現在の基盤が整つてきたと見られる。軍記物語などにも戦闘シーンとして登場した。

戦国時代になってからは軽装の足軽らの白兵戦での必須の技となり、専門の指導者が現れ始めた。「柔術」の名が定着したのもこの頃だ。著名なひとりが竹内久盛だろう。天文元（一五三二）年に竹内流腰の廻りを起こし、戦

闘術として広めた、と伝わる。「腰の廻り」とは腰に差した小刀類で相手を倒す技との意味から名付けられたようだ。その後、柔術は武士の教養として江戸時代まで栄え、最盛期には百七十近い流派が存在したといふ。

柔術の語源は、文字通り「柔能く剛を制する術」。中国の古書の一文から

取つたといわれている。戦場では完全な素手ではなかつたが、組んだ時に力の弱い者でも技術があれば、強い者に勝てるというところに焦点を当てた呼び名だつた。「柔道」の名称も現れた。島根県で根付いていた流派で、四代目の井上正順が直信流柔道と名乗つて、との記述が残つている。柔術は他には小具足、和、捕手、柔、体術、腰の廻り、組討ちなどとも呼ばれていた。

ただし、当時の柔術は投げ技が得意な流派や、関節技で相手を寄せ付けない流派など、それぞれが自慢の技のみを鍛錬していた。現在の柔道のようにいろいろな技を組み合わせて使いこなすようではなかつた。それを各藩の藩校や師家の道場で教えていた。しかし、幕末になると砲銃戦法の発展で戦場での戦術が大幅に変わり、弓術、剣術、槍術などとともに柔術は次第にその必要性が低くなり、武家社会からは徐々に衰退し始める。だが、広い意味で見ると、それは士農工商の身分制度の中で武士だけが戦闘術を習つていた時代から、すべての人に習得の機会が広がつたといえる。

ちなみに相撲は『日本書紀』に記されている野見宿禰が始祖とされるが、格闘技を大きく分類した時に裸に近い格好で行う競技は、豊作祈願や惡靈払いなど神事、宗教に関わるものが多いといわれる。相撲はもちろん神事が始まり。農村では奉納相撲が毎年の恒例行事となり、寺社の建て替えや橋の建設費などの寄付を募る勧進相撲も神社の土俵で頻繁に行われた。プロである現在の大相撲の基も元禄時代の勧進相撲といわれている。一方、柔道に代表される着衣して行う競技は実戦的な身を護る術として誕生したと考えられる。

世界的に見ると、欧州のレスリング、中国の武術、韓国相撲のシルム、モンゴル相撲、ロシアのサンボ、中央アジアや南米など各大陸、国・地域ごとに伝わる多種多様な伝統的格闘技がある。日本の武道から生まれた柔道、相撲以外の剣道、弓道、なぎなた、空手道、合氣道、少林寺拳法などを含め、



その起源には様々な歴史が隠されている。

### 柔道の創始者・嘉納治五郎

柔道の創始者・嘉納治五郎師範は江戸城桜田門外で水戸と薩摩の浪士たちが大老井伊直弼を殺害した「桜田門外の変」が起きた万延元（一八六〇）年の十月二十八日（旧暦）、現在の神戸市東灘区御影町に生まれた。兄、姉が二人ずついる五人兄弟の末っ子で、幼名を伸之助。灘の酒造りが盛んな土地柄で嘉納家もその中心的な酒造家の一族だったという。

生家は、背後の北方に六甲の山並みがそろい、目前には青波が広がる自然に恵まれた御影浜東にあった。自然の白砂を生かした庭園を持ち、後にこの土地を訪れた門弟の横山健堂が「平和、自由、寛大で、大規模な大道場、先生の偉大な風格、体育の趣味、すべてがこの生家の環境の延長でなければならぬと痛感した」と述べたと伝わる。

母定子を十歳（明治二年）で亡くし、父次郎作が明治政府の役職に就いたことから十一歳で上京。母の面影を晩年の手記に「實に慕しいまた、恐い人であった。普段は誠に可愛がってくれたが、何か間違ったことをしたときは本当に後悔するか、悪かったということを自白するまでは許してくれなかつた。よく覚えていることは、母が常に他人のために、自分を忘れて尽くしていることである」と書いた。教育者として生きる道筋は、悲しみの幼年時代に母の人柄とともにその小さな胸に植え付けられたといえるかも知れない。

上京後、柔術と出会うのはそう早くはない。東京大学入学後の十八歳である。成人後も一五七センチ、五〇キロだった嘉納は少年時代は体が虚弱な方で、育英義塾、東京外國語学校、開成学校時代に、体が大きく、腕力の強い者が幅を利かす風潮に肉体的な強さの必要性を強く感じたという。そこで「非力な者が力の強い者に勝てる方法」として柔術を学ぶ志を立てた。「強い体を作り、腕力に屈しないようになりたい」。小柄だった嘉納の切実な思い

が、その後の「柔道」を生み出す機運になつたと言つて良いだらう。

まず、最初に習つたのが天真真楊流である。現在の日本橋八重洲にあつた福田八之助の道場に通つた。天真真楊流は幕末に紀州藩士の磯又右衛門が楊心流と真之神道流を合わせて開いた新流派だつた。

当時の嘉納の熱心さを表す話がある。稽古が進むうちに、どうしても勝てない体の大きな力の強い仲間があり、その相手を投げるために大相撲の元力士から相撲技を習つたが、掛からない。それなら、と湯島にあつた図書館に通い、海外の書物から知らない技を見つけ出し、学校や道場で他の仲間に練習で掛けたのちに、目指す相手に挑戦。見事に投げ飛ばしたという。今で言えば、肩車の変形のような技だつたらしいが、この技は今でもロシア勢などが多用している。嘉納は「努力の成果を見た満足」と話したといふ。

だが、まもなく福田が急死し、同じ天神真楊流で神田お玉が池に道場を開いていた磯正智に師事する。その磯も亡くなり、今度は飯久保恒年の下で起倒流を学んだ。この流派の流祖は不明だが、柳生新陰流を開き、將軍家の剣術指南として知られた柳生宗矩に近かつた茨木俊房なる柔術研究家が「武芸

は形の上で、技がどうの、鍛錬がどうのというだけでなく、その奥にあって形を動かしている心理の妙用こそ、注目すべき」と悟り、起倒流を推奨したとの言い伝えがある。

平服の者を投げたり、捕まえることから始まつたという天神真楊流は形を重んじて、投げ技は巴投、足払、腰投などにとどまって、絞め技、関節技、当身技などに力を注いでいた。これに対し、鎧組討ちから工夫された起倒流は乱れ稽古（今で言う乱取）を主にして、「自在に動くことが勝利の秘訣。相に住み着く者倒れ（敗れ）、相に惑わされることなく、相から離れて働ける者は起つている（勝つ）ことが出来る」と投げ技が重視されていたことが呼称の由来にもなつてゐる。

嘉納は二つの違うタイプの柔術を学ぶうちに、その違いに驚くとともに強

い興味を覚えて他の流派も研究し始めた。そして、その良い部分を合わせて、不要な部分を削り落とした総合的な「柔道」への創作が開始されていったようだ。後の嘉納の蔵書には、両流派のほかに楊心流、関口流、堤宝山流、三浦流、扱心流、直信流、制剛流、夢想流、定善流、氣楽流、不遷流、灌心流などの伝書がそろつていた。

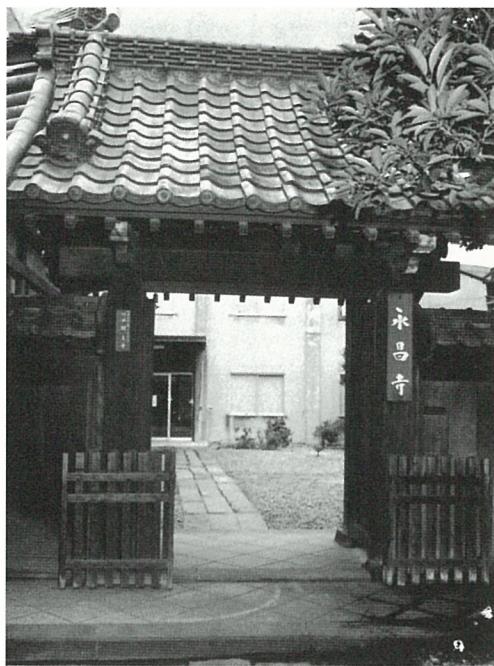
嘉納の回想には次のようなものがある。

「自分の修行中、大変幸せなことが一つあつた。それは当時まだ昔の古い諸流の先生方が生きていたことである。せつかく自分が学んだことを人に伝えたくはあるが、熱心に聞いてくれる者はなしとて、慨嘆している時であつたから、『貴様は大層柔術に執心だそうだ。私は多年柔術を修行していささか得たところもある。この技を誰にも伝えずに死んでしまうのは残念だから、貴様にお話しして置きたい』などと言つて、話してくれた人もいたくらいだ。どの先生も、昔はその門人にすら容易に教えなかつたことも、自分には腹蔵なく話してくれた」

### 講道館創設

明治十五（一八八二）年、東京大学卒業後、嘉納は學習院教師に就く。この年、下谷・北稲荷町の永昌寺に居を借りた。書斎、寝室、客室を兼ねた二畳半の部屋を道場にして、書生や希望者に考案した柔道を教え始めた。講道館柔道の誕生である。門弟は十人に満たなかつた。二十三歳。當時月給八十円。柔術を最初に学んでから五年後のことだつた。

最初の入門者は、後に小説『姿三四郎』を発表する富田常雄の父常治郎（当時の名は山田常次郎）。次がその三四郎のモデルと言われる西郷四郎（同・志田四郎）である。そのころの稽古風景には苦労話が絶えない。例えば、道場の床が抜け、嘉納らがロウソクを手に床下にもぐり修理をしたり、隣が本堂で稽古の振動で位牌が動き出したり、屋根瓦が落ちてきたりした。



明治15(1882)年、講道館創始の場となつた永昌寺

このため、早々と書斎での稽古はやめ、十二畳の道場を新たにつくつた。

講道館柔道創始の趣旨について、嘉納は初期の頃、次のように述べている。「従来の柔術は勝負法を体得するのが主目的で、これに付随して体育や鍊心の目的をも達していた。これに対して講道館柔道は、はじめから体育、勝負、修心の三つの目的を持つていて」

体育とは筋肉を発達させ、身体を丈夫にすること。危険の恐れのある動きを除き、全身の筋肉を働かせることにする。勝負法は「肉体上で人を制し、人に制せられない術の練習」として、当時の服装で可能な技を理屈にあわせて科学的に研究、考案した。修心法としては自分、または他人への徳を養成し、智力を練り、勝負の理論を世の中の一般的なことに応用することを理論付けた。

柔道によつて、心身ともに健全で、情に厚く、謙虚で油断なく、常に最善の行動のとれる人物を育てる。つまり講道館柔道を一言でいうと人間教育であり、その最終目的を「國家社会の繁栄」と「人類の福祉」に置いた訳である。

柔道の呼び名は、嘉納が自らの説くころは「単に術ではなく道」とし、「道が本体。術は付隨したもので、且つ道に入るための手段」としたところによる。従来の柔術と比較して目的段階で目指すものが広くなり、修行法も違つていたため、全く違う名称でも良かったようだ。だが、当初の技は各流派から受け継いだもののが多かつたこともあり、全く違うイメージにはしたくなかったという。ただし、柔術の名称は、その当時、稽古人が喧嘩を仕掛けたり、見せ物として芸を売つたりする者が出ていたことから使いたくなかった、などの理由もある。先に記した島根に「柔道」の名はあつたが、広く知られていないなかつたことも幸いした。講道館はその名の通り、「道を講ずるところ」として名付けられた。

もともと嘉納が柔術を始めた理由が「体を強くしたい」ということ。その目的に合わせて当時、はやり始めていた器械体操、野球、ボート、陸上などの運動を自ら行つて比較した結果、柔術が最適との考えを強めていったという。このため、柔術をさらに進めた形で生み出した講道館柔道を「このようない貴重なものは私一人が修行するのではなく、広く人に伝え、国民にその利益を分かち、与えるべきである」と考えたと伝えられている。

### 講道館四天王

さて、永昌寺で産声をあげた講道館は明治十六（一八八三）年二月に南神保町の弘文館に移つた。道場は約十畳の土蔵で、このころは稽古時間限定していなかつたため、早朝から深夜まで寒さの中で耐えたという。それでも、嘉納は後に「むしろ、記憶が愉快に耐えない」と話していた。

約七ヵ月後の九月に上二番町の大社教の神官の家に移転した。道場は八畳の部屋を当てたが、狭くて戸棚をつぶして十畳にした。門人が増えたため、さらに空き地に二十畳の道場をつくつた。十九年三月には麹町区富士見町の駐独全権公使品川弥一郎子爵邸へ。二十二年に嘉納が欧州視察に出向くまで

のいわゆる富士見町時代を迎える。新規の入門者数が十九年に九十八人、二十年が二百九十二人、二十一年が三百七十八人、二十二年には六百五人となる講道館初期の最盛期、飛躍の時期である。

この頃、嘉納とともに門人の稽古を支えたのが、講道館四天王と言われた富田常次郎、西郷四郎、山下義韶、横山作次郎だ。

入門者の第一号で、西郷とともに最初の有段者となつた富田は、その後も嘉納師範を支え続け、講道館繁栄の基盤を作つた。明治三十七（一九〇四）年に渡米し、柔道の普及に努めたほか、あらゆるスポーツに興味を示し、日本で最初に重量挙げ、ボクシング、射撃なども指導したという。学習院師範。東京体育俱楽部を創設した。山下は富田の一年前に夫人とともに渡米し、ルーズベルト大統領に指導をしたほか、ハーバード大やアナポリス海軍兵学校でも柔道を教えたことで知られる。警視庁主席師範。講道館最初の十段を授与されている。

「鬼横山」と恐れられたのは体の大きかつた横山。彼を一躍有名にしたのが警視庁武術大会だろう。元薩摩藩士である警視総監三島通庸の武道奨励政策により行われた大会は正確な記録が残っていない。このため、開催年は明治十八年から二十一年の間としか分らないが、二度開かれた大会は講道館が他の柔術の流派と最初に行つた試合で、講道館側が足払、小内刈、膝車、大内刈などの足技を展開し、圧勝。天下にその名を知らしめることになった。横山は良移心頭流の中村半助と一時間弱の大試合を行い、「鬼」の異名がついたという。当時は柔術と柔道の激突時代。近代化した講道館柔道の技と理を担う若い門弟たちが、伝統技術を守ってきた老練な柔術専門家を次々に破つていったのだから、見る者には痛快だったであろう。

そして、西郷である。一五三・五センチ、五五・五六キロ。会津出身の小柄な男は、その代名詞でもある「山嵐」とともに講道館の麒麟児として話題の中心だった。山嵐は、今でいうと片襟から背負い風に相手を抱ぎながら、

払腰のようにはね上げる技で、ほぼ%の確率で大男たちを軽々と空中に舞わせたという。この大技を支えていたのが熊手のように指が下を向いていた彼の足。それが山嵐にはぴたりだつたそうだ。警視庁武術大会については、嘉納が書いた柔道教本の中に「警視庁に諸国から諸流の大家が集まつていた頃、試合をしてこの技（山嵐）で勝つた」と紹介されている。相手は柔術界の雄として最後まで講道館と争つた戸塚派楊心流の照島太郎といわれる。このほかに西郷は「猫」というあだ名も持つていた。これは投げられたときに猫のように体を回転させ、体勢を立て直し、足からきちんと着地する。これも猛稽古で取得した得意技「猫の三寸返り」だった。

ともに小柄同士ながら、人一倍稽古熱心で負けず嫌いだった嘉納師範と西郷。この二人の乱取風景で有名なのが、払腰と釣込腰の考案の逸話だ。

嘉納の得意技は浮腰で、相手は嘉納が体に触れたと思ったときには投げらぐのに技を掛けられた瞬間に前に飛んで逃げた。これを投げるために嘉納は、同じ崩しから足を払いあげる払腰を生み出した。悔しがつた西郷が体を反り返して払腰の防御法を思いつくと、今度は嘉納は腰を低くして相手を自分の腰の上に釣り上げ、前に回転させて投げる釣込腰を考え出したという。まだ、技の体系が完全に出来上がっておらず。研究に研究を重ねていた頃の師弟の心意気がじみ出たエピソードだ。

当時、遊ぶ子どもまでもが「俺は講道館の西郷だ」と口走っていたといわれるほどの天才児だったが、その試合の記録はたくさんは残っていない。実は西郷は明治二十二年に嘉納が渡欧する際に講道館の事務一切を任せられたが、その帰国前に姿を消してしまった。逐電。今で言う失踪である。館費の使い込み等の噂が流れたが、実際は中国への憧れから大陸へ渡るために九州へ出向いたようだ。しかし、その後、希望通りに大陸に行けたのか。また、嘉納の全幅の信頼を裏切る形になつた逐電の理由が、本当に当時の若者たち

の間で熱く語っていた欧米諸国やロシアなどに対抗する大アジア主義によるものだったのかは、明らかでない。長崎で所在が確認されていたが、晩年は酒で体を壊し、療養中の尾道で大正十一（一九二二）年に死去した。五十七歳だった。

「姿三四郎」のモデルとして知られる男が講道館にいたのは八年余。だが、その存在は必殺技・山嵐とともに、激動の明治という時代を生き抜く群像として伝説になつた。西郷が初期の講道館を軌道に乗せた立役者の中にいたことは紛れもない事実である。西郷の訃報に接した際に、嘉納は、その才能を中心から惜み、六段を贈つている。

余談だが昭和十七（一九四二）年に発表された富田常雄の小説『姿三四郎』には、明大が深くかかわっている。作者の富田が明大のOBであるだけではなく、主人公の名前のモデルが明大柔道部の姿節雄師範であつたといわれている。姿は明大在学中から、当時師範を務め、「空氣投げ」と呼ばれた隅落の名人・三船久蔵宅に内弟子として住み込んでいた。その三船宅に富田が出入りしており、若き姿に「君の名は珍しいが、いい名だ。今、考えている小説に使わせてもらうよ」と話したという。

以前の柔術は形を重視する稽古が大勢だったが、柔道は自由に技を掛け合つて勝負を決する方法として、乱取を一番手に置いた。ただし、けがの危険性を避けるために当て身技はもちろん、投げ技、抑え込み、関節技などからも危ない技を取り除いた。その後、柔道が国内だけでなく海外にも広く普及していくことも、この乱取を全面に出した指導法が受け入れられたと見られる。形は柔術諸流の特徴を基にして、後の投げの形、固めの形、柔の形、極の形などを新たに作った。ただし、嘉納が最初に習った二流派のうち、起倒流の形だけは難しいが、高い理論を盛り込んでいるとして、古式の形として残された。

そして嘉納が欠くことの出来ないもの、として位置づけたのが講義である。乱取や形は稽古中に少しずつ学んでも出来るようになるが、順序だった理屈を学ばなければ、全体が分かりにくい。稽古の合間に話す程度では柔道の本筋は理解できない。すべてに通じるには生理学、心理学、倫理学などの知識も不可欠、としていた。

最後の問答は、修行者の確認の意味と一度理解したことを、柔道以外のことにも応用出来るかどうかを教える側が確認し、完全に分かっていなければ、それを説き聞かせるための方便とした。

そして、これらから導き出される技術の原理として「無理のない理にかなつた力の使い方」を「崩し」「作り」「掛け」で現すようになつていった。

講道館は明治二十八年に投げ技の指導の基本として五教の技を制定している。合計で四十二ある技の内訳は次の通り。

第一教 膝車、支釣足、浮腰、体落、大外刈、出足払、横落  
第二教 隅返、大腰、小外刈、腰車、背負投、巴投、谷落

式を行い、五日から寒稽古を行つた。

このころには完全に柔術に水をあけた形になつた講道館柔道の修行方法として、嘉納が提唱し続けたのが、乱取、形、講義、問答の四つだった。

以前の柔術は形を重視する稽古が大勢だったが、柔道は自由に技を掛け合つて勝負を決する方法として、乱取を一番手に置いた。ただし、けがの危険性を避けるために当て身技はもちろん、投げ技、抑え込み、関節技などからも危ない技を取り除いた。その後、柔道が国内だけでなく海外にも広く普及していくことも、この乱取を全面に出した指導法が受け入れられたと見られる。形は柔術諸流の特徴を基にして、後の投げの形、固めの形、柔の形、極の形などを新たに作った。ただし、嘉納が最初に習った二流派のうち、起倒流の形だけは難しいが、高い理論を盛り込んでいるとして、古式の形として残された。

そして嘉納が欠くことの出来ないもの、として位置づけたのが講義である。乱取や形は稽古中に少しずつ学んでも出来るようになるが、順序だった理屈を学ばなければ、全体が分かりにくい。稽古の合間に話す程度では柔道の本筋は理解できない。すべてに通じるには生理学、心理学、倫理学などの知識も不可欠、としていた。

最後の問答は、修行者の確認の意味と一度理解したことを、柔道以外のことにも応用出来るかどうかを教える側が確認し、完全に分かっていなければ、それを説き聞かせるための方便とした。

そして、これらから導き出される技術の原理として「無理のない理にかなつた力の使い方」を「崩し」「作り」「掛け」で現すようになつていった。

講道館は明治二十八年に投げ技の指導の基本として五教の技を制定している。合計で四十二ある技の内訳は次の通り。

第一教 膝車、支釣足、浮腰、体落、大外刈、出足払、横落  
第二教 隅返、大腰、小外刈、腰車、背負投、巴投、谷落

第三教 送足払、払腰、後腰、裏投、内股、帶落、跳腰

第四教 浮落、浮技、抱分、肩車、引込返、外巻込、釣腰、移腰、大外

落、俵返

第五教 横車、横分、内巻込、小内刈、足車、背負落、横掛、払釣込足、

山嵐、大外車、釣込腰

講道館創設後十三年。たゆまぬ精進と努力によつて生まれた賜物だつた。

だが、技術的にはこの明治二十年代にはほぼ完成していいた講道館柔道が、最終的な柔道思想にたどり着くにはまだ時間がかかる。嘉納がそれを発表したのは、大正十一（一九二二）年の講道館文化会設立時である。

### 「精力善用」、「自他共榮」

精力善用は、その内容 자체は明治時代の終わりごろには確立されていたと思われる。明治四十三（一九一〇）年の嘉納の著などには、「人生の一切のことは、心身の精力を運用した結果に外ならない。故に人は身体及び精神の能力を修養して、これを高尚なる精力となし、且つこれを蓄積増大することを勉めねばならない。これが精力善用の意味である。人間の力を善く養い、善く働かすということである。物事をなすには、その目的のために精力を利用してはじめて成し得る。最善の精力を養い、最善の精力を利用すれば、その目的を達することが出来る。個人はもとより人生社会一切の事が、その目的を達するには、精力の善養利用にありと断言できる」とある。

さらに嘉納は、柔道修行の究極の目的として、自己の完成と世に利益を与えることを訴えた。現在の雑誌『柔道』の前身でもある『國士』に掲載されると、「世間の事、単独孤立して成し得ることは甚だ少なくて、多数の人の互いに譲り合い、互いに助け合つて、共同の目的を達する場合が

甚だ多い。個人と個人の間ににおいてしかり、団体と団体の間ににおいてしかり、国家と国家の間に置いても、またしかり」と説いている。

精力善用は、柔道の技術に関する根本の原則で、同時に世の一般の事柄をなす原理もある。しかし、自他共榮はさらに進み、物事が進む道筋の中で最高の境地を表現した言葉とされる。

## 学校柔道の広がり

柔道を人間教育として成長させた嘉納は、学校教育への柔道の導入を早い時期から提唱していたが、それが正式に認められたのは明治四十四（一九一）年の文部省令が最初だった。しかし、この時は「柔術」との表現で用いられ、「柔道」に改められたのは、大正十五（一九二六）年になる。

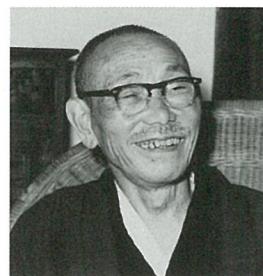
だが、それ以前から各学校では独自に柔道を取り入れる動きが出ていた。慶應義塾は幼稚舎の初代舎長が関口流柔術を学んでおり、明治九（一八七六）年から柔術を指導。明治二十年からは柔道の稽古を始めた。明治十五年に嘉納が教師に任命された関係で、翌明治十六年に柔道を最初に取り入れたのは学習院だ。それに海軍兵学校、東京大学が続く。熊本の第五高等中学校も嘉納の校長赴任とともに柔道を始めた。第一高等中学校、高等師範学校等が稽古を始めた後、明治三十年頃には東京では前出の学校の外、帝国大学、高師付属中学、明治義会尋常中学、獨逸協会中学校、東京専門学校、成城学校などが道場を持ち、活動を行つていた。地方に目を移すと海軍機関学校、一二高、三高、四高、五高、京都府尋常中学、京都府師範、造士館、同尋常中学、奈良県尋常中学、奈良県師範、愛媛県尋常中学、愛媛県師範、千葉医学校などがあつた。

日本柔道界の未来を担う若者たちが、各地の教育の場で技と心を磨き、そしてそれを試す場も徐々に整つてくる。柔道が完全に日本人の生活の中に入り込み始めた。

（文責・竹園隆浩）

嘉納治五郎を語る

諸橋轍次



私は明治三十七年に東京高等師範に入りました。そのとき先生は四十五歳、まさに血氣盛んな時代であります。私は在学四カ年間教育を受け、卒業の後にはずっと先生の下に奉職しておりましたので、いろいろ思い出も多いわけであります。

## 精力善用、自他共栄

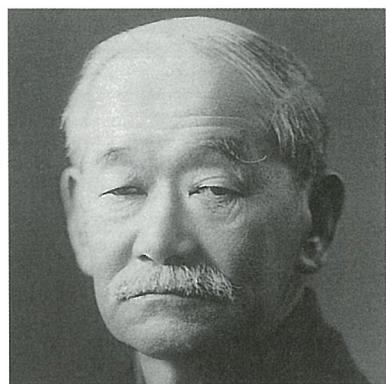
柔道はいうまでもなく先生によつて創成せられ、今日は世界に広布している一つの運動種目であります。先生自身に取つては此は单なる運動種目ではなく、修心の道であり處世の道であり、或いは人生観の基本でもあつたように思ひます。この重要な問題を私が口にすることは誠に僭越至極でありますが、これも已む

を得ません。そこで今は唯先生がその道を完成せられるに至るまでの経路並びに先生の主張せられた柔道の原理についてわずかに聞く所を述べましょう。

先生が柔術を学ばれた最初の動機は、ただ強い者に勝ちたいという単純なものであります。だからその頃の柔道の目的は只身体的の勝負に在つたのであります。然るにだんだんやつているうちに、柔道がからだを作り健康にもよろしいことが実験された。それで少し柔道の目的が広まつてきた。次にまたやつているうちに自身の精神修養に良い影響があることが実験された。先生は若い頃は相当かんしゃく持ちであったそうですが、そういういろいろな欠点も柔道をやつている中に自然に直つて来たといつています。そうなつてくると、柔道は決して勝負だけのものでもない。体育だけのものでもない。そのほかに心を育てるものであるということをお悟りになつたのであります。

然らばこの柔道の原理は如何なるものか。その根本が韜略などに在る「柔を以て剛を制す」に在ることはいうまでもありませんが、その後運動種目ではなく、修心の道であり處世の道であり、或いは人生観の基本でもあつたように思ひます。このまたもとの原理を考えると、人間の精力を一番よく巧みに利用するに在るということに着想せられた。そこで柔道の原理は精力の善用に在りと定められたのであります。そこまで先生の考えが進んでくると、この精力善用ということは、単に柔道の技術の上の問題だけでもなければ、体育の問題だけでもない。人生すべての問題で、もし個人が精力を善用すれば、個人の進歩があり、国家が精力を善用すれば、国家の繁栄が行なわれ、天下の人が、すべてが精力を善用すれば、人類すべてのものが幸福を得るともよろしいことが実験された。それで少し柔道の目的が広まつてきた。次にまたやつているうちに自身の精神修養に良い影響があることが実験された。先生は若い頃は相当かんしゃく持ちであったそうですが、そういういろいろな欠点も柔道をやつている中に自然に直つて来たといつています。そうなつてくると、柔道は決して勝負だけのものでもない。体育だけのものでもない。そのほかに心を育てるものであるということをお悟りになつたのであります。

他面先生はまたいろいろの人生経験によつて、いかなることでも自分だけでは大きな事はできない。必ずや他と協調しなければならぬということを知つて居られます。とすると精力善用という自分の主張もこれを全くするためには、やはりその点にも心を用いなければならぬと着想せられました。そこで「自他共栄」という一項を柔道原理に加えられました。即ち、精力善用、自他共栄の二項が先生の完成せられた柔道最後の原理となつたわけであります。私などのおさめております儒教の教えなども同じ経路を辿っています。儒教ではまず「己」を修む」ということを教えます。その方法はいろいろありますが、まず「己」を修める。ところが「己」を修めるということは人を治めるところまでいかなければ完成しない。また反対にいふと、人を治



講道館の創設者・嘉納治五郎

所以はその点に在るのであります。

柔道について申述べたいことはこれだけであります。序ながら柔道という命名について述べましょ。私は嘗て伺つたことがあります。

老子には「柔は剛に勝つ」という一節があり、また「天下、水より柔弱なるは莫し、而かも堅強を攻むる者は之に能く勝つ莫し」、「一番弱いところの水が一番強い堅いものに勝つ」という言葉があります。そういう点から柔道の名をおとめることとは己を修めていかなければ、人は治まらぬ。この二つは、二つであるけれども、一つである。そこで修己と治人の二つを以て儒教の根本原理としているのであります。ちょうど先生の到達された精力善用と自他共栄との関係と同様であります。精力を善用したものでなければ自他共栄はできない。自他共栄を全うしようと思えば、精力を善用しなければならない。この二者は全く二つにして一、一にして二であります。

以上柔道の原理を精力善用、自他共栄に在りとせられたのは、先生が永年に亘つて体あたり柔道を実行し、身にしみて後に感得せられた実験済みの原理であります。單に人から教えられた、或いは書物を読んで気が付いたというようなものではありません。先生の教えに力のある

柔道について申述べたいことはこれだけであります。序ながら柔道という命名について述べましょ。私は嘗て伺つたことがあります。

老子には「柔は剛に勝つ」という一節があり、また「天下、水より柔弱なるは莫し、而かも堅強を攻むる者は之に能く勝つ莫し」、「一番弱いところの水が一番強い堅いものに勝つ」という言葉があります。そういう点から柔道の名をおとめることとは己を修めていかなければ、人は治まらぬ。この二つは、二つであるけれども、一つである。そこで修己と治人の二つを以て儒教の根本原理としているのであります。ちょうど先生の到達された精力善用と自他共栄との関係と同様であります。精力を善用したものでなければ自他共栄はできない。自他共栄を全うしようと思えば、精力を善用しなければならない。この二者は全く二つにして一、一にして二であります。

「術にあらず道だ」というのは流石に先生の識見の高い点だと思います。昔文惠君という君が料理人の庖丁さばきの鮮やかさに感じて「技もまたここに至れるか」と歎息した時、料理人はむしろ不平で、私の修めているものは道であります。技よりも進めり（進・乎・技）といつたという話が莊子に出ています。先生は始め甲

南と号されたが、六十歳以後は進・乎・斎と号されました。多分この莊子の句から取られたものであります。序のまたついでであります。七十歳以後は帰・一斎と号されました。これは恐らくは先生の主張せられる精力善用、自他共栄の柔道の原理が、古今名賢の主張と揆を一にするとのお考えであります。「百王の法は同じからざれども帰する所の者は一なり」とは荀子の言葉であります。

（昭和四十四年七月、講演から。『柔道』同年十一月号より転載）

—後略—



嘉納履正・第二代講道館長。1975年、訪日のエリザベス英女王と